一つの事を貫く（上）

稽古後の朝風呂楽しみ

大相撲は通常、年6場所に加えて春夏秋冬と巡業がある。年3回の東京場所（1・5・9月）以外は始終国内旅行をしているようなものだった。現在コロナ禍で巡業はなくなり、本場所も両国で6場所連続で行われ、次の名古屋場所（7月）が久々の地方開催になる。

柏戸は旅から旅の力士生活を嫌がらず、逆に楽しんでいたふうに見える。各巡業地での厳しい朝稽古を終えた後、仲良しだった若三杉（後の大豪）、若秩父ら同世代の力士と連れ立って朝風呂に行く光景が見られた。その楽しそうな表情は若者らしい活気に満ちたものだった。

写真は昭和34（1959）年の冬巡業中と思われ、九州のどこかの町のようだ。橋脚の下の向こう側にはボート練習の一団も見える。柏戸は21歳になったばかり。初めて三役・小結に昇進したころだ。

4力士中、花籠部屋の若三杉、若秩父はきっちりマゲを結い直し、縞模様の丹前も冬の力士の装いとしておしゃれに着こなしている。北葉山に至っては羽織姿の正装だ。その3人に比して柏戸のマゲは風呂上がり直後の櫛も入っていないダンゴのような形だし、外套のボタンを全部留めている分、コートの下は浴衣（ドロ着）ではないかと連想してしまうほど取材にはふさわしくない格好だ。

風光明媚な橋の上で、若手人気力士の写真撮影。左から若三杉、北葉山、柏戸、若秩父

写真取材に無頓着

当時のコメント自体は残っていないが柏戸の「いいよ、いいよ。撮影なんて、すぐ終わるよな」の声が聞こえてきそうだ。付け人を経験した元力士たちに柏戸の人柄を聞くと「無頓着な人。気取りなどとは無縁の気さくな人だった」という答えが返ってくる。こうした写真取材の着物などの用意は付け人の仕事である。もし付け人が日時の確認等でミスした場合、関取から大きなカミナリが落ちる場合もある。柏戸に関しては本人も周辺も緩かったということなのか!?

巡業中の何よりの楽しみだったのが夜のチャンコだ。移動の連続で名所旧跡の観光などはできないが、巡業列車が着いたその晩の夕げは「お相撲さんが来た。特別サービスだ」と地元のおいしいものが膳に並べられることが多く、食欲をそそった。こうした繰り返しで入門時は70キロ台だった体重は三役昇進時は110キロまで増え、横綱の時は140キロを超えるまでになった。毎日、宿泊先が変わる慌ただしさだが、順応できるタフな心身の持ち主が番付を上げられるのだ。

コツコツタイプ自認

柏戸は自らのことを「コツコツタイプだよ」と自己分析したことがある。これには課せられたことは忠実にこなし、努力するという意味合いが込められた。

若手修業中から師匠に、とにかく突っ張る相撲を取るように言い渡され、疑いなく徹して、出世を重ねた。取り口に迷いはなかった。相手を攻めた後、組んだ後はつり寄りでなおも攻めた。その際、土俵際では〝いったん腰を下ろして、万全な形で寄っていけばいいのに〟と周囲は思ったが、攻めの相撲を貫くあまり、自分のスピードを御しきれないこともあった。ライバル大鵬の弟弟子・麒麟児（後の大関大麒麟）に逆転のうっちゃりを食らってはファンを嘆かせた。しかし腰高だとして迷いなしの自分の戦法。「仕方ない」と割り切った。

どこかの駅のプラットホーム。こちらは夏巡業。巡業部長として力士団を引率した花籠親方と談笑する柏戸

親方になり、元人気力士が就くことが多い花形の記者クラブ担当時には大きな帳面に幕内・十両力士の場所中の日々の勝ち負け・成績を手書きで記す仕事があり「とにかく真面目に取り組んだ」と記者たちを驚かせた。別の部署で力士の成績管理は行われており、現役を引退したばかりのお相撲さんに〝筆記具に慣れてほしい〟という側面がある仕事だった。ある面、適当で良かったのだが「今までの先輩親方から引き継いだ大事な務め」と言っては、慣れないペンを持ち、悪戦苦闘した。こうした生真面目さも持ち合わせていた。

相撲界への恩返し

それが約18年にわたって担当した審判長でも貫かれた。立ち合いが合わない力士たちを土俵下から大声で叱責した。「自分は大相撲で育てられ、こうして生活していける。後輩たちにも引き継がせ、お客さんに喜んでもらえる相撲を取らせなければならないんだ」。角界への恩返しという気持ちが生きがいとなって、日々の親方生活の気持ちの張りにもつながっていた。しかし晩年、病魔に侵され、体が思うようにいかなくなるのであった。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

藤島出身石川の師匠

○…若三杉、若秩父の師匠・花籠親方（元幕内・大ノ海）は八郎潟に面した秋田県井川町出身。玉錦の二所ノ関部屋に弟子入りし、引退後、都内杉並区阿佐谷の日大相撲部に隣接して部屋をつくった。初代横綱若乃花の活躍が「阿佐谷勢」という言葉を生み、輪島、大関魁傑らを育て名伯楽として知られた。藤島地域出身で日大時代アマ横綱になった石川孝志（元幕内）には自らの現役時代のシコ名をつけさせた。石川はプロレスに転身。石川敬士として活動した。

毎週火曜日付に掲載